



土木界隈  
四季鳥  
私たちの近くに息づく野生

連載を終えて

1年間にわたり連載させていただき、ありがとうございます。読者の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

連載当初にも書きましたとおり、このコーナーに登場した鳥たちは、われわれのごく身近にいる(いた)鳥ばかりです。人の暮らしの変化に伴う環境の変化にさらされながら、あるものは滅び、またあるものはたくましく生き続けています。鳥の言葉がわかるわけはありませんから、彼らがどんな思いで生きているのか、それを知る術はありません。私がここで書き綴ってきたことは、鳥たちの気持ちを代弁したものなどではなく、単なる思い込みや勘違いなのかも知れません。それでも彼らの姿を探して目を凝らし、その囀りに耳を澄ませることで、何か見えてくるものやわかることがあるのではないかと思います。

鳥たちは私たちの暮らしの変化を映す鏡です。その鏡像が歪むとき、われわれの暮らしにもどこかに歪みが生じているような気がしてなりません。その歪みをどう解消していくのか考え続けること、それが鳥たちがわれわれに出した宿題なのだと思います。

(中田一真)

「土木学会誌に見開きで鳥の写真を載せる」、そんな大胆な企画が果たして受け入れられるのだろうか？

しかし、実際に連載が始まるとそんな不安はすぐに消え、私自身も、内容を知っているにもかかわらず、毎月学会誌を開くのが楽しみになった。少なくとも文章中心の記事とはまったく異なる「感じる」ページであり、おそらく読者の皆さんにも何か伝わったのではないかと思う。そして、そうであるとするならば、この連載はその役割を果たすことができたとと言えるだろう。

最後に、1年間学会誌を盛り上げてくれた中田さんに心から御礼を申し上げます。(喜多直之)

写真・エッセイ：  
中田 一真  
本連載担当(主査)：  
吉田 陽一 喜多直之

